

防災問題における資料解析研究 (28)

河田恵昭・田中哮義・林 春男・高橋智幸・柄谷友香

要 旨

巨大災害研究センターでは、所員それぞれの研究テーマ以外に、センター全体に関わる活動を継続し、研究成果のアカウンタビリティの向上に貢献している。本年は、1) 巨大災害研究センターセミナー、2) 地域防災計画実務者セミナー、3) 大規模災害対策セミナー、4) メモリアル・カンファレンス・イン・神戸、5) 災害対応研究会、6) 第1回比較防災学ワークショップ、7) データベース「SAIGAI」、について内容を紹介する。

キーワード：データベース、巨大災害、比較防災学、セミナー、ワークショップ

1. 巨大災害研究セミナーの開催

毎月、第2金曜日の午後、防災研究所内にてオープンセミナーを開催している。話題提供者は1名で、出席者は、毎回、当センターの関係教官をはじめ、学生のほか所内のほかのセンター、部門の教官などであり、活発な議論を重ねている。開催日時と講演者名及びタイトルは、以下の通りである。

・第1回(4月14日)

中島 正愛(防災研究所地震災害研究部門教授)

「鋼構造建物に突きつけられた試練—米国ノースリッジ地震と兵庫県南部地震における鋼構造建物被害とその後の動向—」

・第2回(5月12日)

橋本 学(防災研究所地震予知研究センター助教授)

「測地測量を地震発生予測にどう活用すべきか?」

・第3回(7月14日)

丸山 敬(防災研究所大気災害研究部門助教授)

「強風時における市街地上の気流性状の予測について」

・第4回(10月13日)

三村 衛(防災研究所地盤災害研究部門助教授)

「変状する地盤を解析する」—関西国際空港の沈下解析と砂地盤の液化強度の評価—

・第5回(11月10日)

永田 茂(鹿島建設技術研究所・巨大災害研究センター客員助教授)

「広域の地震被害評価の現状」—広域地震被害の予測・評価方法や結果の活用方法について—

・第6回(2月9日)

中川 一(防災研究所水災害研究部門助教授)

「土石流のハード・ソフト対策効果の評価に関する考察」

・第7回(3月9日)

北原昭男(巨大災害研究センター助手)

「木造建築物の耐震性能評価について」

2. 第6回地域防災計画実務者セミナー

平成12年度実施したテーマは「災害対応を学ぶ」であり、プログラムは、以下の通りである。

第1日目(8月2日)防災基礎講座

12:00 受付開始

13:00 防災研究所所長あいさつ

オリエンテーション(～13:30)

13:30 講義 1(～14:30)

「最近のわが国の風水害の特徴」(河田恵昭)

14:40 講義 2(～15:40)

「噴火災害と防災」(石原和弘)

15:50 講義 3(～16:50)

「震災復興と生活再建」(林 春男)

16:50 第1日目終了

第2日目(8月3日)

各地の防災ベストプラクティスに学ぶ

9:00 ベストプラクティスに学ぶパネルディスカッション(～12:00)

“防災面での広域連携をどうすすめるか”

「JICAによる国際災害救援活動の現状と課題」

(JICA 国際緊急援助隊事務局 樋田俊雄)

「ボランティアによる国際災害救援活動」

(被災地 NGO 協働センター 村井雅清)

「阪神淡路大震災メモリアルセンター構想」

(兵庫県防災監 齋藤富雄)

「官民共同の広域防災連携構想」

(関西広域連携協議会 田中英俊)

コーディネーター: 林 春男

12:00 昼食

13:00 最近の災害対応に学ぶ(～17:00)

“台風9918号・集中豪雨の教訓”

対応の実態報告とパネルディスカッション

「熊本県・龍ヶ岳町(台風災害)」

(龍ヶ岳町総務課 山下 正)

「山口県(高潮災害)」

(山口県消防防災課 川尻博之)

「福岡市(都市洪水)」

(福岡市市民局 吉原万佐美)

「豊橋市(竜巻災害)」

(豊橋市消防本部 前田勝利)

コメンテーター:「気象災害としての特徴」

(石川裕彦)

コーディネーター: 河田恵昭

17:00 第2日目終了

第3日目(8月4日)今後の防災の方向を考える

“国の動きを知る”

9:00 国土庁(～10:00)

「避難勧告基準について」

(防災局防災調整課 加治屋強)

10:00 運輸省(～11:00)

「高潮・津波災害対策について」

(港湾局海岸・防災課災害対策室長

廣瀬 輝)

11:00 建設省(～12:00)

「地下街を含む水害対策等について」

(河川局防災海岸課災害対策室長

吉野清文)

12:00 終了

*平成13年度「地域防災計画実務者セミナー(第7回)」は、10月3日～5日に開催予定である。

3. 第4回大規模災害対策セミナー/ジェーン台風から50年を考える

日時:2000年9月3日(日)

会場:大阪・交通科学博物館ホール

出席者:大阪市民、府民、防災関係者ら約350名

開催趣旨:

この大規模災害対策セミナーは、阪神・淡路大震災の後、2度とこのような悲惨な災害を繰り返すべきでないという目的の下で、阪神復興岩井フォーラムの活動の一環として、毎年開催して参りました。最初の2回は地元、神戸の六甲アイランドで、1999年は伊勢湾台風40年ということで、三重県の桑名で開催いたしました。私たちはボランティア活動として主催し、毎回、地元行政機関のご支援をいただき、今回は4回目として建設省近畿地方建設局、大阪府、大阪市のご援助を得て開催しております。

ジェーン台風による高潮によって、この会場のある弁天町界限も水没いたしましたし、現在の大坂環状線は城東線と西成線に別れ、環状線とはなっていませんでしたが、大きな被害を受けました。当時、市民の足はもっぱら市電とバスでしたが、その復旧にも長時間を要しました。南にも北にも地下街はありませんでした。地下鉄も御堂筋線が梅田と難波の間を走っているだけでした。そこで、この50年の私たちのまちの変わり様を想像していただき、いま高潮が、あるいは同じ水災害である津波や河川の洪水による氾濫がもし起こったらどうなるのか、それらの災害から生き延びるための危機管理について皆様とともに考えたいと思います。

丁度50年前の9月3日、奇しくも同じ日曜日の午

後 1 時 15 分頃、ジェーン台風が神戸付近に上陸いたしました。この台風は進行速度が毎時 30 から 40 キロメートルと遅く、それだけ長い時間暴風に晒され、また大阪湾に大きな高潮を発生させ、市街地に氾濫して、大阪市と尼崎市を中心に 550 人近い犠牲者を出しました。日曜日ということもあって、ご家庭にお父様がおられたということが不幸中の幸いとなり、この数字になったということでございます。もし、他の日だったらこの数倍は犠牲者が出たと考えられています。

大阪では、その後 1961 年（昭和 36 年）にも、第二室戸台風が来襲し、同じ規模の高潮が発生いたしました。幸い事前に 10 万人も避難したおかげで、また、高潮対策事業が進んでいたことも効を奏して、高潮による死者はありませんでした。すなわち、1950 年（昭和 25 年）のジェーン台風以来、高潮による犠牲者はここ大阪では発生していません。しかし、我が国の高潮常習地帯で大阪が一番高潮が発生しやすいことが歴史的にわかっております。

1999 年、台風 18 号によって熊本県を中心に高潮災害が発生し、私たちの高齢社会は大きな犠牲を出してしまいました。もし、ジェーン台風級の高潮が大阪に象徴される我が国の臨海大都市を襲えばどうなるのか？そのことをジェーン台風 50 年に当たる今日、皆様方と共に考え、決して忘れることなく高潮災害に備えようというのが、この集いの目的でございます。

プログラム：以下の通り。

11:30 受付

都市河川防災についてのビデオ上映・パネル展示

13:00 あいさつ

池田 靖忠 大規模災害対策セミナー実行委員会副委員長

藤芳 素生 近畿地方建設局 局長

13:05 経過説明会及び基調講演

『都市水害に備える～高潮・津波・洪水への危機管理』

河田 恵昭 大規模災害対策セミナー実行委員長

13:40 ビデオ上映会

『露の五郎 地震はなし』（大阪市 市民啓発ビデオ）

14:15 地元市民の証言・体験談

角 正基 港区商店会連盟会長

松永 正光 淀川左岸水防事務組合

15:10 パネルディスカッション ー当時の映像・写真をもとにー

『ジェーン台風から 50 年を考える』 地域の安全と危機管理

パネリスト

青島 行男 大阪府土木部都市河川課長

北村 雅敏 大阪市港湾局企画振興部計画課長

田原 末雄 日立造船株式会社 OB

角 正基 港区商店会連盟会長

松永 正光 淀川左岸水防事務組合

コーディネーター

隅野 哲郎 大規模災害対策研究会副会長

4. Memorial Conference in Kobe VI の開催

4.1 Memorial Conference in Kobe の趣旨

Memorial Conference in Kobe は阪神・淡路大震災を統一キーワードとして 2005 年までの 10 年間開催する予定にしている会議で、今年度はその第 6 回目にあたる。本会議では毎年一般市民・被災者・ボランティア・NGO・行政関係者・医療関係者・研究者・技術者・企業関係者等が分野をこえて一堂に集い、その 1 年間に見出された学術的成果と、この災害からそれぞれが学んだことを互いに交流し、理解を補うこと、および阪神・淡路大震災から得られた教訓を 21 世紀と世界に発信し、安全安心で心豊かな社会作りに貢献することを目的としている。

4.2 会議内容

(1) 概要

本年度は国際ボランティア年ということもあり、「災害ボランティア」を全体のキーワードとして会議を開催した。

午前中には、被災地だけでなく、遠く千葉県、広島県、長崎県からの参加も含む 16 名の災害ボランティア経験者が自らの貴重な体験を紹介した。

続く、午後のパネルディスカッションでは、震災発生以来ずっと被災地で積極的なボランティア活動を継続してこられた 5 名のボランティアリーダーが、自らの活動と考えを発表し、その後、会場にいた全員で、災害時のボランティア活動について討議し、理解を深めた。

今後は今回の成果を報告書にまとめ、広く普及に努める。

(2) プログラム

実施日時：平成 13 年 1 月 20 日 9:30～16:45

場所：神戸海洋博物館大ホール

内容：

9:30 開会の辞：新野幸次郎組織委員長

9:45 「わたしの「災害ボランティア」体験」

—それは何をあなたにのこしているか?—

災害ボランティアに関する証言16編を
朗読発表

挨拶：河田恵昭（京都大学防災研究所
巨大災害研究センター長）

中国歌曲・音楽：李浩麗（ソプラノ）

12:00 昼食

13:00 パネルディスカッション

わたしの「災害ボランティア」体験

コーディネーター：山口一史

（ラジオ関西）

パネリスト：

細川裕子（被災地 NGO 協働センター）

天川佳美（きんもくせい）

榎本まな（特定非営利活動法人コミュ

ニティ・サポートセンター神戸）

荒井勲（ひまわりの夢企画）

田中保三（株）兵庫商会）

15:00 ニューフィルハーモニー・ジュニアオー
ケストラ演奏会

メモリアル・コンファレンスのオリジ

ナルテーマ曲”DISASTER” 井上堯之

作曲（関西初演）

15:15 パネルディスカッション

「対談・震災6年目のまとめと提言」

土岐憲三（京都大学大学院工学研究科）

山口一史（ラジオ関西）

16:30 閉会の辞 土岐憲三（実行委員会委員長）

(3) 展示：（於：研修室及び廊下）

・2000年災害映像

・これまでのメモリアル・コンファレンスのあゆみ

(4) 16の証言

1) 「震災医療に参加して（当時の手記からの抜粋）」

広島県広島市 竹岡 秀生

我々は、神戸・淡路大震災の医療ボランティアとして神戸市須磨区保健所管内の避難所の巡回診療を行うことになった。私は、この医療ボランティアの一員として参加した。

神戸市に入ったのは2月12日、須磨区保健所のあるJR鷹取駅周辺は、南側、北側が長田区で北側、西側が須磨区というように両区の境界にあたる。

特に長田区は、区全体が焼けただれ、鷹取商店街は焼け落ちて地獄のようで、隣接する須磨区でも、多く

の建物・高架橋が倒壊あるいは損壊していた。12日から毎朝、拠点である須磨区保健所でミーティング。

巡回診療班スタッフは、私を含め広島チーム（梶川病院）と神戸西市民病院チーム（病院が倒壊し保健所に配属）の混成で編成。

2月13日、マイクロバス（緊急車輛）を使用、保健所を出発した。マイクロバスは全半壊した家やビル、瓦礫の中を縫うように、コスモス、松風南地区福祉センター、環境局事業所、天理教、旧須磨跡跡、うず潮、JR鷹取工場、朝鮮総連、須磨水族館、高倉中学体育館、外浜老人ホームなどを散在する震災避難所を巡回した。各避難所の避難者数は概ね50~100名であった。

私が滞在した期間に診療した患者数は一日平均30名で、風邪、気管支炎、高血圧、便秘、腰痛、胃炎など内科疾患が多かったが、幼小児では臍周囲炎が2名いた。多くの患者が高齢者であり、中には105歳の女性がいた。ある女性患者は泣きながら目の前で親族を失った悲しみを話してくれた。

特筆すべきは西市民病院の看護スタッフ達の懸命な活躍で、彼女たちは勤務していた病院が倒壊し、各保健所に巡回診療スタッフとして配属されていたが、彼女たちは的確に避難所と患者を把握しており、診療は順調であった。

一般診療やメンタルケアも確かに重要であるが、災害時の「巡回診療」では、さらに重要な役割があった。それは各避難所の衛生情報の収集、避難者への指導という役割である。避難所では衛生環境の低下、トイレ、換気、暖房、ベットの扱い、敷いたままで干されない布団、避難者のプライバシーなどが大きな問題で、「医療の基本とは何か？」を見せつけられた思いであった。

しかし、一方で医療ボランティアにとって、避難所でのこれらの問題に関しては、なかなか手を出しにくい領域であったようである。

巡回診療班は避難者への衛生指導も行ったが、保健所との連携があり、収集した情報が活かされ、対応も早く、私の短い滞在期間中にも避難所内での問題もかなり改善してきたように思われた。住宅の確保は医療の面からみても、早急に解決すべき問題と考えられた。

2) わたしの「災害ボランティア」体験 滋賀県大津市 辻 隆

わたしがあの地震を体験したのは、職場にいる時でした。京都では震度5、消防署の仮眠室のベッドで今までに体験したことのない縦揺れと、横揺れに飛び起

き、自分の身を守ると共にテレビのニュースを見ると、近畿地方でかなり強い地震があったことが各地のニュースでわかったが、まさか阪神地域に被害が起きているとは想像もせず、8時30分に交代しました。

その後、被害の状況は甚大であることがテレビのニュースで判りました。仕事で現地に行けないのでボランティアで行こうと、以前から赤十字のボランティアとして登録していたので17日から1週間後に日赤の車に乗って三宮に入る。車の渋滞の中、高速道路は茨木まで、近畿自動車道で松原まで南下して三宮に入った。私の仕事は日赤に集まった物資を各避難所に輸送する役目でした。

その際、車は滋賀県から持ってきました。地理に不安がありましたが、地元の学生ボランティアが乗り、スムーズに輸送出来たことがあげられます。

また、避難所で物資に並ぶ長い列にどの顔も不安と疲れがありました。ボランティアの人達はその中で懸命にやさしい声を掛け合い励ましておられたのが印象的でした。

長田区、新神戸駅、須磨区と車の渋滞の中、物資を配り終えた時は夜の8時になっていました。

もっとやりたい思いが、被災者を見てると感じるが、三宮を後にした。途中大混雑の中、尼崎を過ぎても被害が続き、京都市内に入ったとたん、地震がなかったようにスムーズに車が走っていました。

地震後、自分に何か出来る事と言う事で、新聞に「子どもさんを預かります」という記事を書きました。しかし、遠くであるということもあり、連絡はありませんでした。その後、大津市ボランティアセンターから芦屋の方でバイクを希望している情報を得ましたので、その方にバイクを譲ることになりました。

その方が言うには、皆が被害を受けているならあきらめもつぐが、こうして同じ地域で被害を受けなかった所があることが、辛抱出来ないとおっしゃっていた言葉が印象的でした。

この地震の後、日赤の災害ボランティアが出来、年一回の訓練に参加をしています。

地震直後はあんなにボランティア活動が盛んだったのが、人ごとのように感じる事が情けないと思います。昨年わが家を引っ越したきっかけに、就寝場所にはタンス等倒れるものは置かず、二階ベランダにロープを置いて非難に備えました。また家内の実家老夫婦の近くに引っ越しました。また隣の人が、年寄りの方なので久しく付き合いをしています。

地震がわが家で起きても、備えだけはして、家族、近隣者の方の安全を守っていきたくと考えます。

3) 私の阪神大震災ボランティア体験 「瓦礫の町にひまわりを」 神戸市西区 荒井 勲

私は、平成3年から青少年の健全育成ボランティアの実践として、ひまわりの花いっぱい運動をしていました。毎夏、大輪のひまわりに元気をもらっていた私は、このひまわりに明るいまつくりを委ねる事にしました。

震災当時、県の「心豊かなまづくり五百人委員会」で会員として受講していた私は、仲間に声をかけて「ひまわりの夢企画」というグループを立ち上げ、約700リットル、350万粒の種や苗を被災地に配布しました。もちろん、他のグループにもドサリ、ドサリと配布を依頼しました。希望者多数に郵送もしました。

やがて夏。仮設に、公園に、更地と化した住宅跡地に、沢山のひまわりの大輪が咲き、秋になると山のように礼状が届きました。「勇気づけられた」、「心癒された」etc.

その礼状と写真に心打たれた私は、「幸せの黄色いひまわり展」という小さな展覧会を開きました。来場した沢山の人が感動の言葉を残してくれました。その一言、一言がボランティアに疲れた私の心を癒してくれました。

その中に少し目線の異なった人がいました。じっくりと展示を見てから「園芸セラビー実践だ」と言われたのが、防災心理学を研究している林春男先生と立木茂雄先生でした。当時「セラビーって？」と無知の私は聞き返したのを今も覚えています。「人の為に」なんて考えてもいませんでしたが、何か胸のつかえが取れたようで目頭が熱くなり、何度も何度も握手を求めています。

以来6年。復興のかけ声の元、多くの人の笑い声に支えられ、種々のひまわりを被災地に咲かせ続けています。

年明けの1月17日、神戸21世紀復興記念感謝事業が始まります。感謝の花として、ひまわりが選ばれ、ポートアイランドの仮設跡地に巨大なひまわり畑をつくる計画があります。もちろん、私たちが沢山の種を提供します。復興文化のひとつとして「ひまわり文化」を残すことが私たちの夢です。

—その他の活動—

<ひまわり温泉の出勤>

トラックの荷台に、3人一度に利用できる仮設の温水シャワーを特設、出勤した。

1. 1月24日～1月27日 港島中学校
2. 1月28日～1月31日 楠中学校

3. 2月1日～2月4日 神戸生田中学校
4. 2月5日～2月9日 五位の池小学校
5. 2月10日～8月5日 若宮小学校

利用者の累計は、述べ1万人。6ヶ月に及んだ若宮小学校では、風呂の他にひまわりサロンを設置、避難所で種々の支援活動をした。

夜毎の一品のおかず提供、温泉たまご1万個の配布、住民と一緒にひまわりの種の袋詰め、勇気付けのひまわり温泉放送等。たった一つの自慢、公立小中学校内で風呂の提供は、自衛隊以外、私たちだけ。「検証を！」

以上、いろいろ書きましたが、書き切れません。

実は、震災前から書いていた、月一話のエッセイ「笑いのセールスマン」の第一話と二話を震災後、自費出版しました。

多田野文（ただのふん）は、私のペンネームで、登場するA君は、私自身です。突然起こった地震に、私自身と町がどう変化していったかの6年間の車のセールスマンがボランティアに走った記録です。

理解出来ぬことは、この本から読み取って頂けたらと思います。

利用後は、京都大学の防災研究所へ参考資料として送ります。

- 4) 「避難所での春祭り、そして今、ハローボランティア」 ハローボランティア・ネットワークみえ 山本康史

私が震災のボランティアに参加できたのは大学の後期試験が終わった3月初め。すでに復興に向けての声が聞こえ始めたころでした。

大学生協のボランティア募集に個人参加して西宮のボランティアセンターに赴き、そこで指示された先が東須磨小学校の避難所でした。早速小学校に行ってみると、そこでは5名の学生ボランティアがおり、避難所のお手伝いをしていました。

避難所の管理は校長先生、そして被災者の自治組織の方々でしっかり行われており、その為か避難所の雰囲気もよく、ボランティアの仕事は主に食事の分配、子供の遊び相手、年配の方の話し相手という、とても簡単である意味気楽なものばかりでした。そんなある日、校長先生の発案で、子供たちのための春祭りをやろうという事になりました。

私たちボランティアは校長先生や被災者の方々の指揮のもと、救援物資の中から冷凍のお好み焼きや焼きそば、くじ引きの商品を探し出し、レンタル屋さんからわたがし機や鉄板を借り、輪投げやバスケットゲー

ムを用意し、近くの牛乳屋さんからは牛乳ビンのキャップをいただいて、それを手作りのお金にして避難所や近所の子供たちに配りました。

そして春祭り当日、私はお好み焼きの手伝いや輪投げゲームの手伝いをして、避難所や近所の子供たちと共に思いきり楽しい一日を過ごしました。子供の笑顔に誘われて、避難所全体がやさしい気持ちに包まれたようでした。

その翌日、またいつものように子供たちを連れて近くの公園でサッカーをした帰り道、ひとりの男の子から「お兄ちゃん、地震が起こって、どうだった？」と聞かれました。

「僕は大丈夫だったけど、大変だったろう？」と聞き返したところ、彼は「うん、お兄ちゃんたちに出会えたから良かったよ。ありがとう。」と笑顔で答えてくれました。僕は心の中で「僕の方こそありがとう。」と答えました。

現地に入る前まで、被災者の方々はもっと大変な、つらい日々を送っているだろう、僕も送るだろう、と思いついていました。しかしそれはいい意味で裏切られたように感じました。「神戸の人たちは僕が思っていたよりずっと陽気に、神戸の子供たちはずっと逞しく、震災を乗り越えようとしている！！」

そしてこの思いは、このとき以降の私自身の災害ボランティアに対する考えにも大きな影響を与えてくれました。「楽しくてもいいんだ」「遅く前進していこう」と考えることが出来るようになり、それが3年後の日本海重油事故に際する、そして今行っているイベント支援で地域に防災の知恵を残していこうという「ハローボランティア・ネットワークみえ」を立ち上げる際の原動力になっているのです。

- 5) 「たった2日間のボランティア体験から」 千葉県八街市 今井 和代

地震の日の朝、テレビを見ていた夫は命令も出ないのに、当然の如く支度を整えて出勤し、神戸へと出発していきました。

同じ消防職員である私は、「何かしなきゃ！」と思うものの、二人の子どもを抱えて身動きは取れず、ある団体から相談を受ければ、「生理用品、オムツ、粉ミルクを送って」とお願いし、農家の友達には「大根、人参いっぱい積んでいって豚汁作ってよ」と頼むことくらいしかできずに焦っていました。

1週間後、神戸から帰った夫は「おまえも現場を見てこれからの自分の仕事を考えるべきだ」と言いました。その10日後やっと休暇が取れ、子ども達の協力

もあって神戸に出発。地震から半月以上も過ぎているというのに、街は涙も出ないほどの惨状でした。

「何かしたい!!!」との思いは帰宅してから私の頭を離れることは無く、日々強くなっていきました。そして、1年半後「復興のイベントスタッフ募集、期間は2日間」に私は飛びつきました。

8月16日の朝、出発直前に先輩が交通事故で亡くなったと連絡が入りました。残されたご家族のために何かしなければとの思いと、1年半も待ち続けた神戸に行きたい気持ちが頭の中で渦巻きました。そんな時、「俺も救助隊員だ、おまえの気持ちはわかる。早く行け!」という先輩の声が聞こえた気がしたのです。奥様に事情を話し、新幹線に飛び乗って、着いたところは被災者が不法占拠した公園のと真ん中、自称大学生ボランティアという人達が全国から送られてくる救援物資で生活をしている、何とも理解しがたい世界でした。

「何これ!話が違うじゃない、私は先輩のお葬式まで放ってきたのよ!」とすぐにも帰りたい気持ちでいる私と一緒に参加していた高校生のちいちゃんが「おばさん、ここに住んでいるおじいちゃんやおばあちゃんに喜んでもらえるように頑張ろう!」と励ましてくれたのです。そこには、行政の支援を受けられないお年寄りが肩を寄せ合って生活している姿がありました。それを見兼ねた青年達が夜になると酒とつまみを持って話し相手をするために通ってきてくれました。

予定の2日を終え、バス停に向かう私を仲良しになったおじいさんは「元気で暮らしたぞ、旦那と仲良くな。」と優しく見送ってくれました。その時のおじいさんのすてご姿を私は今も忘れることができません。

自分の力で立ち直れる人はそれでいいのです。その先に希望をつなぐ力を持つことのできない人をどう支えていくのか、それが大切なだとこの時強く感じました。

この8月、私たち夫婦は隣の空き家を無理をして買取りました。70歳を超えた母と一緒に暮らすために、そしてお年寄りや近所の人とコミュニケーションを持つスペースを確保するためです。

隣の建物からは、今トンカチの音が響いています。宿直明けの夫が修理費を浮かすために自分で床を張り替えている音です。

地震の発生を阻止することはできませんが、みんなが自然に助け合って生きることのできる地域社会を望みつつ、私たちは小さな歩みを続けていきます。神

戸は私たちをそんな気持ちに導いてくれたのです。

6)「私の災害ボランティア体験」 堺市 三上成子
阪神大震災後、早や6年も経とうとしているので、その時のボランティアの細かい事は忘れかけてきた。これでは風化され、今後の災害にも役立つ他の方のためにもお手伝いの参考にもならぬと書き記しておこうと思う。

わが親姉弟がその地区にいたので、5日後にはリュックショッピングカーに肉野菜、コンロ等を入れるだけ入れ、重くのしかかる肩を痛めながら、夕方から夜の東灘の大道路を家屋が傾いたり、つぶれた間をぬってゾロゾロと歩いて行ったものです。その後3ヶ月後には灘のボランティアグループに入り、篠原北町、灘浜、王子の各仮設住宅訪問、そこでバザー開催、生協より参加した六甲アイランドでの焼豚や焼き鳥の販売、教会からの尼崎方面の仮設訪問や西宮での炊き出し、個人的には母校の小学校の教室に入っていた母子との交流であった。

以上、どれも印象深く意義深いものでしたが、少し具体的に述べてみましょう。4階に居た70代の母親と50代の息子さんの二人で、日に何回となく4階への階段の上り下りで年老いた母と病弱の息子さんは疲れてしまった。母親は王子仮設に入った後、バイクに追突された、もしくは転んで入院、その後ボケも少々出て、疲れとけがもあり、病院を変えて今も入院中とか。この親孝行の息子さんが病弱に関わらず、毎日、毎日病院に見舞い、世話をされているとか。私も病院に物を持って伺った時、日に日に弱り歳を取られた母親を見て、どうしてあげたらいいやらと思うばかりであった。真夏の中、暑いのに熱々の焼豚を並んで買われる方々、100円均一のバザー日用品を喜んで両手いっぱい買って帰られる方々、仮設を尋ねると身の上話を、初めて会った私に写真と共に孫のことなどを話し、ストレスや寂しさを紛らわそうとなさる方、冷蔵庫がない、夏服が欲しいなどと相談される方、行くとかえっておやつを出してくれたり、電話やトイレを貸して下さり、反対に慰められ、世話になったこともあった。集会所にしたいので外国から送ってくれた大テントを、何日もかかって石拾いや草抜きの整地をして貼り、ようやく出来上がり、2~3日使ったある夜に大雨風となり、あくる朝、JRの線路に飛んで引っかかるという、とても残念な目にもあった。

ボランティア同士の会合も何回も開いた。感想、反省をして孤独者を防ぐ、特に弱者と言われるお年寄りや障害者の力になれたか、ダンボールのみのお隣とか、

気を使って話も出来ぬ、着替えもしにくい、赤ちゃんも泣かせられない、という人々の気持ちを分ってあげたか、せめて話を聞いてあげられたか、充分相談に乗ってあげられたか、仮設の夏の暑さ、冬の寒さに自分だったら耐えられたか、孤独死にまっていたる孤独な人の心の中はいかばかりか分ろうとしたか、障害のある方が普段以上に不便さのある施設で助けられたか、交通、光熱、水道の断たれた中、私はもし他の地方の町の災害被災地にわざわざ泊まったり、通ったりして行ったでしょうか。行けなかったかもと自分のボランティア精神の不足を反省する。

7) 「私の災害ボランティア体験'95.4.20~4.26」 広島県 小川 敬三

40年間の会社生活を終え、少しでも地域に溶け込みたいと思っていたころ、視覚障害者のための点訳講習を受け、ボランティアの知識もないまま点訳ボランティアの仲間に入り、1年余り続けていました。

そんなある日、福祉センターで阪神大震災ボランティア募集の掲示を目にし、自分のような者でも大丈夫だろうか？現地で生活はどうだろう？等々の不安と、何かしたいと言う好奇心とが交錯するなか、'95.4.20早朝、鷹取中学校へ出発。

中学校に到着すると簡単な説明を聞き、持ち場についたものの、要領を得ずただ右往左往し、邪魔者扱いされているのではとさえ感じました。

初日の作業が終り、寝室代わりの教室の一部で数人が寝袋にくるまって色々話し合っているうちに、父親を早く亡くし戦中戦後、母の手一つで隣近所の助けを借りながら育ててくれ、そのお陰で今があることなどへの思いが共通していることを知り、わたしはそのとき、母の後ろ姿を思い浮かべると同時に、支えて下さった方々への感謝の気持ちで込み上げるものを感じました。

翌朝起きて見るとお年よりの方がトイレや廊下の掃除をしておられ、“おはようございます”と声を掛けると、『おはよう、よく眠れたか！寒くなかったかの？』と、優しい言葉が返ってきたり、ある人は『汚れ物があったら持っておいで一緒に洗ってあげるよ！』と親切に言って下さったりで、昨夜の思い詰めた気持ちはどこへやら。

みなさんと一緒に料理づくりを楽しんだり、授業を終えた中学生たちとも楽しく作業ができ、夜は学校のロビーで一緒にテレビを見たり、将棋をしたり、広島出身の方からは“台風19号の時はどうだった？”と懐かしく話かけて下さるなどで、みなさんに親しみを

感じました。震災後初めて水族館が開演されたときには、わたしは車椅子の方の世話を引き受け、被災者の方たちと一緒に水族館へ行くこともできるなど、本当に有意義な体験が出来たことに感謝しています。

あのとき以来、積極的に人との出会いに努め『共に生き・共に歩む』喜びに生き甲斐を感じ、今では点訳作業にとどまらず、いろんな方々とも自然体で接することが出来るようになりました。最近では、中学校の選択教科で点訳を選んだ生徒さんとも週1回関わったり、ときには自然保護活動にも参加しています。

最後に、共に元氣一杯頑張りましょう。

8) 「ボランティア元年の幕あけ」 兵庫県西宮市 渡辺 芳一

17日(月) 鉛色の空

老夫婦だけの一軒家、何をどうしてよいのか、しばらくは呆然自失の状態。薄暗い戸外へ出ると仰天するような光景だ。そんな折り、近くの会社独身寮から駆けつけた一団の若者たちが、生き埋めの高齢者を手際よく引き出し、病院まで運び込んでくれる。

日頃は地域とは全く疎遠な人たちの間に一

18日(火) 容赦ない寒風

昨日助け出された老人の家族が寮を訪れ、お礼をと思っても誰一人、名乗り出てくれなかったそう。

さわやかな余韻の残る青春群像に乾杯！

21日(土) 晴

顔見知りの大工さんが突然に訪れ、明日から雨だろうと瓦のずり落ちた屋根に青シートを張り巡らしてくる。

自分の家は放ったまま連日、高齢者宅の奉仕を続けている昔気質の職人だ。寝不足と過労から目も充血してしまっただ顔をみると、とてもそれ以上の応急措置は口にせななかった。

22日(日) 廃屋に無情の水雨

妻が知人の葬儀へ参列す。重い梁の下敷から助け出されたのに容態が急変したとのこと。

あんなに優しい人柄だったのにと嘆く。

駅前の倒壊建物の地底から、かすかに鳴く子犬を通行人が発見。近くを工事中の職人さん10人が雨の中を3時間も穴掘りの末、子犬を6日ぶりに救出。飼主の老人が嬉し泣きする中、周りから歓声と拍手が暫く鳴り止まなかったそう。

27日(金) 晴

墓地へ出向く。この歳になるまで見たこともないクラッシュ現象を目にする。水害の直後のように墓地全体が沈み込み、いたるところから湧水している。

近くの川の支流で激しい土石流が発生。その関連かとも思う。わが家の墓石も泥の中にめり込み、転げ落ちたまま。ただ通路に面した墓石の崩れだけが整頓されている。

学生風だったとも社会人とも、噂だけが墓石を黙々と片付け去っていったとのこと。

28日(土)晴

寒風吹く小学校の庭で穴道湖の蛭汁がふるまわれる。遠く松山から来てくださったそう。ありがとう、ありがとう、と何回となく言っていく老被災者の涙声。

30日(月)寒気凛冽

妻の立ち直りは早い。物資配布のボランティアとして出掛ける。

帰宅後の土産話。東京から駆けつけた救援の大学生が一向に昼食をする気配もないので事情を聞くも持ち合わせがないとのこと。リュックには何故か下着を詰めてきただけ。

女たちがカンパして弁当を渡すと、あつという間に平らげてしまい、大笑いする。しばらくたち、救援物資に食料もあったのに指1本触れない感心な青年だと、みんなの評価が一変したとのこと。無鉄砲だが純真、いい若者だ。

もう行き止まりと苦悩する人に、咄嗟の気転で義侠の行為に出る。そして相手からの礼も、まして己の名も告げず去ってしまった人。

そんな輝きに満ちた元年の幕あけだった。

9)わたしの「災害ボランティア」 神戸市東灘区 山崎 主知子

ふれあい食事の会

高齢組合員とボランティア組合員48名、コープこうべ生活協同組合の支援を受けて、毎月1回会食とふれあいタイムの交流をすすめている。阪神・淡路大震災のあの日が定例日であった。前日に準備した食材や食器が床に飛び散り、悲しい思いをした。

とん汁の炊き出し

淡路島三原町農業研究グループから炊き出しを受け、コープ深江店店頭で1,600人の被災者に暖かいとん汁がふるまわれた。「ごちそうさん」「よろしゅうおあがり」と言葉の交流にも熱い思いが通い合った。

深江北夏まつり

コープこうべ青少年活動だった盆おどりを地域の夏まつりとして、夜間開放の小学校校庭で開催されるようになって5年目、各自治会活動も休止の中、開催が危ぶまれた。この夏まつりには地域住民のコミュニティの場として役立って欲しいとの願いがあり、継続し

たい思いが強まる日々、多くのボランティア出演者の中から河内音頭、初音家秀若一門との出会いがあった。そして夏「震災犠牲者供養-河内音頭大会」が実現し、10,000人の住民が校庭を埋めた。「上を向いて歩こう 涙がこぼれないように・・・」とみんなが歌った。そして泣いた。

仮設住宅訪問

小物の手芸作り、話し相手、カラオケなど盆おどりの練習も始まり、多忙な訪問日だった。地藏盆の夜、2日続いた小さな広場のちようちんの灯り、喜びの輪、おどりの輪、初めて見る笑顔、とてもすてきだった。

ふれあいサロン

まちの医院の待合室、通院患者やその家族、近隣住民など手芸を楽しみ、励まし合った。医院の支援のおでん大会が開催され、暖かい思いやりの味がみんなの胸にしみた。

講演活動

兵庫県こころ豊かな人づくり500人委員会の第3期研修生として、2年間の成果が実る直前の災害だった。同期生から「何か市民レベルで書き残そう」との呼びかけに心の底からの思いをつづった。

「私の阪神大震災」の発刊がきっかけとなり、東京防災研究所研修会に参加の機会を得た。「地域に生きる」をテーマとして災害時の主婦のくらしや、神戸の復興状況を語り伝えた。東京都、横浜市、金沢市などの依頼を受け、防災推進の一端を担う。

この貴重な体験は生涯忘れる事のできない有意義な活動として、私の心に残った。

ふれあい喫茶

市管復興住宅の集客室でボランティアの手作りケーキとお茶を楽しみに集う。月1回おしゃべりに花が咲き、2時間が過ぎると高齢一人暮らしの方たちは別れを惜しむ。秋の夕日を背に寂しそう。「また来月ね」

このように地域社会にボランティア参加して40年近くになります。どの活動も私自身の心の支えとなり、時には励まされ、慰められ充実した日々を過ごしています。

昨年、半世紀を共に生きた夫と永遠の別れがありましたが、悲しみの中にも各活動に助けられました。

21世紀を目前にこの数々の体験を生き甲斐として、まちづくり、人づくりのために、そして何より自分のために地域に生きたいと強く思います。

10)「わたしの災害ボランティア体験」 神戸市須磨区 中嶋 栄子

私が「胎児おうえんボランティア基金(現在、円ブ

リオ基金と改名)」と出会ったのは、避難所に生活し10日ほどたった頃でした。

子供二人のことはもちろん、当時妊娠5ヶ月だったので身体のこと、栄養のこと等とても心配でした。それに地元出身なので両親や妹・弟家族死ぬのなら皆一緒だなど、余震が続くたびそう思っていました。そんな中、避難所にいる妊婦さんを捜して、東京から、明石から来てくれました。私の不安な気持ち、子供たちのこと、家のこと、そして何より赤ちゃんのことを話しました。栄養はもちろん、風邪が流行っている中、無事生まれるのたろうかと不安の材料は山ほどありました。その話をじっと聞いて励ましてくれました。そしてすぐに必要な物をそろえてくれました。

その中に“お母さんガンバレ、赤ちゃんガンバレ”と書かれた基金と「生命尊重ニュース」とがありました。

話をしたことで、私や家族だけでなく、赤ちゃんを応援してくれる人がいることで、大変勇気づけられました。そして自分たちの置かれている状況を再確認することで少しずつ心を落ち着けることができました。話をすることで心の重荷が少し取り除けたのだと思います。

その後“お母さんガンバレ、赤ちゃんガンバレ”という文字を見て頑張れたと思います。

そして5月23日、無事長女が誕生しました。今5歳で元気に走りまわる娘を見て、本当にたくさんの方たちの愛で育っているのだと思います。

この誕生の知らせをしたのを機に今現在私もこの円ブリオ基金のメンバーの一人として幸せな赤ちゃんが生まれてくるよう、またいのちの大切さをたくさんの方に知ってもらえるよう活動をしています。

11)「わたしの震災ボランティア体験」 神戸市須磨区 東田 せつ子

私は震災の年、8月から病院ボランティアをしています。きっかけは、平成元年に大腸ガンとなり、今12年目の命のボーナスを頂いた事、又、全壊した二階建の下敷になった長男。一度はあきらめかけた息子を通りがかりの男性2人と夫が必死になって助け出してくれた。この尊い命に対して、当時のさまざまなありがたいのお返しを少しでも出来れば...との気持ちからです。

1995年8月兵庫区にある鐘紡記念病院で8名のメンバーからスタートしました。

多くの患者さんの中に震災による心のケアが必要な方や、色々な病気の方が来院されました。

私たちはロビーでその方々とお話し、聞き手にまわって共に涙を流し、手を握り合いました。当時、「頑張ってくださいね」という言葉はあまり意味がなかったように思います。

私も息子の件は胸の奥に秘め、親身になって相手の話を聞くことが出来ました。診療が終わり、帰って行かれる後姿の足取りが少しは軽そうに見えたのは私の気のせいでしょうか。

あれから6年、月日が患者さんの心をいやしてくれただけだと思っています。現在は、ロビーでのお年寄りのお話相手、院内の案内、目、身体の不自由な方の代筆、赤ちゃんの子守り、それにお茶の用意等、土・日以外でもメンバーが36名に増え、毎日交代で頑張っています。

私達、病院ボランティアの役割は、来院される沈みがちな患者さんに対して人間らしく生きるための心配りと病院の雰囲気を出るだけ明るくさやかに、との気持ちから地域と病院との橋渡し役として、ずっと続けていきたいと思っています。

余談ですが、震災から2年目の2月1日、私の夫が大工仕事中に2階の屋根から転落し、脳挫傷、左上半身多発骨折になり、三次救急へ。昼は大工仕事、夜は実兄の家の修理と疲れがあったのだと思います。幸い一命は取り留めました。この幸運に感謝して、微力ながらももっとも困っている方々の力になりたいと思っています。

12)「感謝」 神戸市中央区 三田 ひで子

震災から早くも6年の歳月が経ちました。避難先の体育館では、溢れ出るゴミの後片付けと、トイレの掃除に追われていました。恐ろしい、怖いなど思う余裕すらありませんでした。忙しかったおかげで、一瞬でも震災のことを忘れてのことが出来ました。ケガ一つすることもなく助かった命に感謝をしながら。私にも何か出来ることはないかと考えました。

考えて選んだ仕事が、清掃のお仕事でした。不思議なくらいに恥ずかしいとか、汚いとか、まったく思うこともなく働いていました。

被災された方々の程度は、人それぞれ違ってはいましたけれど、みんな心をつなぐに、大勢のボランティアの方々に助けられ、大勢の方々と知り合うことが出来ました。今も本当に良い経験をさせていたのだと思っています。

13)わたしの「災害ボランティア」体験 京都市 高室 悟子

阪神・淡路大震災が起こった時、「被災地のために何かしたい!」と思った私の頭をよぎったのは、「生協」の二文字でした。

「そうだ、生協でなら、何かできるかもしれない。」

そんな私の思いにまるで呼応するかのように、生協のチラシと一緒に届けられたのは、「がんばれこうべ!カード」と名付けられたボランティア募集の紙でした。

それから、6年。今も生協の仲間との震災支援の活動は、続いています。

一番最初は、障害者の安否確認。避難所での炊き出しや物資配布などを経て、やがて仮設住宅ができると、私たちは仮設住宅で「バザー」と呼ばれた活動を始めました。

この「バザー」は、一般に行われる不要品の販売ではありません。生協の組合員から募金を集め、その募金で食料品や日用雑貨を買い込みます。そして、それらを仮設住宅に持って行き、定価の半額以下で売るというものでした。

仮設住宅がおおむね町外れや山の上など、買い物に不便な場所にあることから思いついた「生活者の発想」から始まった活動でしたが、仮設住宅のみなさんには大変、人気でした。

そのうち、焼きそばやカレーの屋台を始めたり、「文化的な催しも」と抹茶席やちぎり絵教室、年末は賑やかなことをと、福引大会など、月に一回の訪問ごとに知恵を絞り、工夫を凝らしたものです。

この「バザー」は、仮設住宅の最終期限となった1999年6月まで続けました。

しかし、そこで私たちの活動が終わったわけではありません。

京都に避難されてきた被災者のみなさんの会「県外避難者京都の集い」と、私たち京都生協ボランティアが出会いました。

故郷を離れて暮らすみなさんの心の傷は深く、私たちにできることと言えば、お食事会にご招待したり、お花見や散策のお供をすることぐらいです。それでも、何かしら役に立っているのでしょうか。私たちに会うことを楽しみにしていただいています。

「震災ボランティア」と言うと、直後の救援活動や炊き出し、物資配布などを誰でも思い浮かべるのではないでしょうか。もちろん、それはそれでとても大切なことです。

けれども、災害から歳月が経てば経つほど、必要とされるボランティアもあるのだということを私は知っています。

ただ、寄り添っていること。

華やかな活動でも、目に見える支援でもありません。それで被災者の心が救われるわけではありません。

けれども、「私たちはこの人たちと一緒にいたい」という気持ちを大切に、これからも県外避難者のみなさんとの交流を続けていきたいと思っています。

14) 「私の災害ボランティア体験」 広島RB赤十字奉仕団 朝野 千明

降りしきる雨の中、愛知広域ボランティアセンター(ボラセン)から情報収集に西枇杷島町ボラセンへバイクを走らせた。水に浸かった畳や家具が山のように積まれた道は大渋滞だ。雨はどんどん強くなり作業に出掛ける前のボランティアの人達は既にびしょ濡れだ。寒さに震えながらボラセンが配るカッパを着る女の子を見たときは、たまらなく切ない思いに襲われた。

強くなる雨に道路が浸水を始めた旨広域本部に連絡すると間もなくボランティア活動の中止が決まった。まだ屋前でニーズも未消化だが安全には換えられない。勇気有る素早い判断にボラセンスタッフへの信頼を強めた。

私も現地バイク隊とともにハンドマイクを持って町内を回る。バイクで走っては黄色のガムテープに名前を書いて貼っているボランティアに活動中止を伝える。「こちらは西枇杷島町ボランティアセンターです。活動、お疲れさまです。・・・ちょっと残念そうだが、“中止、了解”の返事を伝えてくれる。初対面だが不思議な連帯感だ。

災害救援ボランティア・広島レスキューサポートバイク赤十字奉仕団は今年2月に設立し、東海豪雨災害が初出勤だ。バイクがどれだけ役に立つか不安もあったが、大渋滞の中消毒液や医師・看護婦の搬送、情報収集、物資の急送と役立った。現地では、警察、県庁日赤愛知県支部などを始め、ボラセンのスタッフが我々を信頼し、支援してくれたことを大変感謝している。更に嬉しかったのは被災地の人たちの励ましの言葉だ。道を探ねに入ったバイク屋のご主人は、「壊れたらいつでも持ってこい。ただで直してやるから。」と声をかけてくれた。

バイクに乗って行かなくても広島ナンバーの車で給油に行くとかガソリンスタンドの人が「広島ボランティアの人たちですね。有り難うございます。」と、言ってくれる。こんな経験は初めてだ。

出勤前、一部に名古屋は水も引いて、大きな被害は出ていない。という情報があった。しかし、役場も浸かり、車も家も全てが水に浸かった町の様子を本当に

見たのだろうか。ボランティアが片づけを手伝った家であっても、畳を捨て、床板を壊して床下のヘドロを掻き出しただけで、一階部分は人がいられる状態ではない。避難所の壁1.5mの高さに水平線が入っているのを見たときには、情報伝達の大切さと難しさを痛感した。

広島メンバーが撤退する日、ボラセンのスタッフが立ち上がり拍手で送ってくれた。ものすごく感激した。我々にチャンスを与えてくれ、支えてくれた人たちみんなに感謝しています。

被災者の皆さんが日常生活を取り戻すのには長い月日がかかるとは思います、その日は一歩ずつ近づいています。

15) 「私の災害ボランティア体験」 神奈川県横浜市 IVUSA 佐藤 杏子

私が災害に対するボランティアを始めたのは、大学に入ってからのことです。今年私が参加したのは、三宅島での降灰除去作業、愛知の豪雨で同じく被害を受けた岐阜県恵那地区での砂の除去作業、そして、直接的なボランティアではありませんが、岩手県でのボランティア・コーディネーター養成研修会が大きなものです。

今回は岩手での研修会について話したいと思います。この研修会は事前研修と実施研修にわかれていて、私は実施研修の方にだけ参加させていただきました。岩手山噴火を想定して、実際に避難所を設置するというものでした。

私が今回一番思ったことは、災害への対応というのは私達みたいなボランティアをやる側はもちろんですが、普通にそこに暮らしている人がもっと考えるべきなのではないかということです。そしてボランティア側も災害が起こったときだけ行くのではなく、もっと常に災害について考え、それを住民の生活の中に浸透させていくべきだと思います。それに必要なのは、今回のような住民をまじえた訓練を行うことではないでしょうか。私は今まで、ボランティアというと現場で肉体労働をするというイメージが大きかったのですが、研修会に参加してみて、そのボランティアをふりわけたり、事務や経務のような仕事をやるボランティアも必要になったり、時にはそこで暮らす住民もボランティアと同じことができるということを知りました。また同時にボランティアを受け入れるのはそこに住む人でなくてもいい、受け入れるのもボランティアでやってもいいということも知りました。

次に、私が岩手でとても驚いたことが1つありまし

た。それは現地の人の意識の低さでした。訓練だからかもしれないですが、マニュアルなしで動かなくてはならなかったのに、研修の中で本当に岩手山噴火の危機を感じていないのではと思ってしまいました。はじめ私は自分たちのことなのになぜもっと意識を高められないのかと、少し怒ってしまっていたのですが、じっくり考えているいろいろな人のお話を聞いてわかりました。意識の低さを責めるのではなく、意識を高めるためには何をすべきなのか考えていくべきだと。

今、災害がどこかでおおくと、世間は起こったそのはじめだけに注目して、少したつと関連の報道は少なくなります。三宅島のことがいい例だと思います。緊急災害派遣も重要ですが、それ以上に前もっての準備・対策や、また長期を考えたボランティアが重要だと言うことが、今回の研修を機会に本当に理解できたと思っています。私自身まだまだ未熟ですが、自分のできることを、IVUSAとしてできることをしっかりと考えて、これからも活動していきたいと思っています。

16) わたしの「災害ボランティア」体験 西宮市 岩瀬 利治

昭和22年4月 私は長野県飯田市で街の大半を全焼する大火で実家の料理屋を失いました。戦後の大変の時、両親とともに苦勞して街の復興に当時バラック建のレコード店より流れる曲「リンゴの唄」でした。

リンゴに力づけられ頑張復興のイメージに街の防火道路に中学生とともに「リンゴ並木」を造成しました。

今回は阪神淡路大震災に西宮市で再度の被害に人生には苦難がつきものだと仮設建物を元気を出してと紙芝居を各所で花咲いさんを桜の花をガレキに咲かせますとさげびました。

桜の花がいつやらリンゴの花に変えまして市民運動で西宮リンゴ並木後援会をそして追悼の数1,146本とし各所にリンゴの苗木を植樹しました。

関西にリンゴの木と当初は心配でしたがリンゴの生産地で研究をして頂き各所より苗木のご支援がありました。

復興のシンボルとして各学校に犠牲者の数の追悼リンゴの木とし生徒さんと植樹し今年5年の年月で大きく成長し、今年はリンゴの実が各所で出来ました。

リンゴ当番迄出来、夏のクラブ活動の前に水をかける姿が見られました。

小公園にもリンゴの木を植樹し、各所でご老人さん達がリンゴの木の入手と今年はリンゴの収穫に震災の教訓を将来に継承と復興のシンボルとして各所にリンゴの木成長しています。

ボランティアとして会員も3人参加していただいて目標に進んでいます。

現在803本迄完了しました。

(5) 成果のまとめ—Memorial Conference in Kobe VIからの提言—

Memorial Conference in Kobe VIは、2001年1月20日、神戸海洋博物館において悪天候にもかかわらず多数の参加者を得て開催された。震災発生から6年間のMemorial Conferenceを通して、阪神・淡路大震災が持つ多様な側面について学び、震災について正しく理解し、異なる背景を持つ人々が語り合い、伝え合う努力を続けてきた。今年のMemorial Conference in Kobeでは、災害ボランティア活動を全体のテーマとしてとりあげた。「わたしの『災害ボランティア』体験—それは何をあなたにのこしているか?」と題した証言募集を行い、応募していただい中から被災地だけでなく全国各地から寄せられた16の証言を選び、午前中の会議で朗読していただいた。午後のパネルディスカッションでもわたしの「災害ボランティア」体験について語り合った。李浩麗さんは美しいソプラノを大迫めぐみさんの伴奏で聞かせてくれた。井上堯之さんが作曲してくださったメモリアルコンファレンスのオリジナルテーマ曲“DISASTER”が、井上堯之さんご自身のギター、ニューフィルハーモニー・ジュニアオーケストラの演奏で、関西初演された。また、展示会場ではさまざまな団体の試みが展示された。

今年の会議から得られた教訓は次のとおりである。

すなわち

1. 被災地外から多くのボランティアが訪れた、それ以上にたくさんのボランティアが被災地内から生まれた。それは人間としての「使命感」に始まり、「感動」につながった。
2. ボランティア体験を通して、わたしたちは日頃失っている「やさしさ」「感謝」「希望」「たくましさ」という言葉の大切さを思い出すことができる。
3. 木を植える、花を咲かせる、話をする、ただ寄り添う、地域と生きる、ボランティア活動の広がりは無限であり、それぞれに喜びがある。
4. 災害ボランティアは助けられる人、被災者は助けられる人という区別はない。ボランティアも被災者もともに出会い、支えあうことで、大きな力をもらった。
5. ボランティアは決して震災を契機に生まれたわけではない。震災前からさまざまな社会活動をしてきた人たちが、この震災の中で自分がすべき活動を見つけ、実行に移してきたことをボランティア活動とよ

んでいる。

6. 「あなたは何に困っていますか」「あなたは何ができますか」という2つの問いに応えることが、ボランティア活動を成功させる鍵である。

7. ボランティア活動に踏み出す前に、自分の周りに信頼に満ちた、健全な人間関係の存在が必要である。

8. ボランティア活動をさらに活発にするためには、個人の善意だけでなく、防災に関わるNPO活動を支える基金作り、ボランティアを教育・訓練する仕組み作りが不可欠である。

来年のMemorial Conference in Kobe VIIは、2002年1月19日(土)、神戸海洋博物館において志を同じくする多数の参加者を得て開催する。

5. 災害対応研究会

5.1 概要

平成10年4月17日から毎年4回、オープンセミナーを開催している。話題提供者は2名で、出席者は、毎回、当センターの関係教官をはじめ、行政の防災関係者、研究機関の教官などであり、活発な議論を重ねている。平成12年度の講演テーマは、『震災の検証』であった。開催日時と講演者名及びタイトルは、以下の通りである。ただし、平成13年1月には、神戸市国際博覧会場で行われる防災技術フェアに参加し、公開シンポジウム形式で研究会を執り行った。

5.2 開催日程

第1回

日時：4月28日

講演者：片田 敏孝

講演題目：「高齢化社会における避難問題」

講演者：河田 恵昭

講演題目：「国際検証会議報告」

第2回

日時：7月28日

講演者：柄谷 友香

講演題目：「生活再建の指標化に関する提案」

講演者：重川 希志依

講演題目：「国際検証会議報告」

第3回

日時：10月27日

講演者：田中 聡

講演題目：「災害記録の資料化」

講演者：林 春男
講演題目：「神戸市検証報告」

第4回

京都大学防災研究所 巨大災害研究センター主催
「災害対応研究会」オープンショップ
日 時：1月19日
場 所：神戸国際展示場（防災技術フェア参加）

プログラム

13:30 開会挨拶

「災害対応研究会の紹介」

河田 恵昭 京都大学防災研究所

13:40 基調講演

「21世紀前半の地震事情」

橋本 学 京都大学防災研究所

14:40 休憩

15:00 パネル討論

「21世紀の防災の姿をさぐる」

コーディネーター：林 春男 京都大学防災研究所

パネリスト：甲斐 達朗 千里救急救命センター

伊永 勉 災害救援研究所

重川 希志依 富士常葉大学

立木 茂雄 関西学院大学

中地 弘幸 神戸市安全公社

6. 第1回比較防災学ワークショップ

ーみんなで防災の知恵を共有しようー

6.1 開催趣旨

阪神・淡路大震災をはじめ、ノースリッジ、台湾・集集、トルコ・マルマラ地震災害による都市地震災害や国内での有珠山、三宅島、雲仙・普賢岳などの噴火災害、1998年と1999年の全国的な氾濫災害と土砂災害に見られるように、被害様相は国や地域によって大きく異なる特徴をもっている。そこで、すでに実施してきている都市地震災害に関する日米共同研究を核として、とくに災害の社会的側面に焦点を当てたワークショップを毎年1月に神戸で開催する。この開催については、毎年無料で会場提供されることが神戸国際交流協会と約束済みである。第1回は神戸国際展示場で、2001年1月18日に開催した。また、本ワークショップは以下のような5つの特色および意義をもつものである。

(1)従来のワークショップと違い、講演を中心とする

のではなく、広く会場から意見の提出を求め、それを集約するやり方で会場運営し、全参加者の能力向上を目指すユニークな試みである。

(2)比較防災学に関するワークショップは世界で初めての開催であり、21世紀の初めにそれを開催するインパクトは大きい。

(3)会場が毎年、同じ場所に固定されており、継続性の高いワークショップである。

(4)メモリアル・カンファレンス・イン神戸とセットで、1つの震災記念事業と位置づけられる。

(5)研究者のみならず、行政の防災担当者、災害情報分野の民間企業の社員などが、これまでになかったオープンな雰囲気活発な意見交換ができる。

6.2 開催日時

2001年1月18日・19日 10:00 開始

6.3 開催場所

神戸国際展示場

6.4 プログラム

10:10 開会挨拶

河田恵昭 京都大学防災研究所 巨大災害研究センター教授

10:20 個人発表

GIS Based Flood Loss Estimation Modeling in Japan

Dushmanta DUTTA

治水安全度と土地利用の相互依存関係に関する分析

高木 朗義

Network based simulation for flood disaster reduction

Srikantha HERATH

応急仮設住宅のあり方に関する国際的比較考察

三船 康道

フェミニスト研究からみた自然災害：災害における社会的脆弱性の分析とこれからの防災計画

尾原 悦子

西宮 Built Environment データベースの構築

牧 紀男

震災時における建築物の被害調査手法の開発ー公的機関による建物被害調査の課題ー 堀江 啓

震災復興対策の事前準備計画に関する方法的的研究ー住宅復興対策需要の事前推計

池田 浩敬

12:00 昼食休憩

13:00 個人発表

(米国) UCLA・デラウェア大学 Psychological Distress and Use of Health Services Following Urban Earthquakes in California

Linda Bourque

Application of Standardized Definitions and Procedural Protocols to Describe Structural Damage and Injury in Earthquake Loss Estimation

Julie Park

Population-Based Case-Control Study of Earthquake-Related Deaths and Hospitalized Admissions Sustained during the 1994 Northridge CA Earthquake

Marizen Ramirez

Public Support and Priorities for Seismic Rehabilitation in the East Bay Region of Northern California

Kathleen Tierney

Building Community Partnerships Toward a National Mitigation Effort: Inter-Organizational Collaboration in the Project Impact Initiative

Tricia Wachtendorf

14:50 休憩

15:00 日米パネルディスカッション

(1)実効性のある防災対策を具体化するために—最近の都市型地震災害をいろんな角度から見比べてみよう—

・コーディネーター

目黒 公郎 東京大学生産技術研究所

・話題提供者

Kathleen Tierney University of Delaware

上田 孝行 東京工業大学理工学研究所

中林 一樹 東京都立大学都市研究所

武田 丈 関西学院大学社会学部

(2)わが国の自治体における防災課題

・コーディネーター

河田 恵昭 京都大学防災研究所

・登壇者

一宮 大祐 兵庫県・防災企画課

酒井 浩一 高知県・消防交通安全課

近藤 竜也 愛知県・消防防災課

向中野 聡 北海道・防災消防課

岩崎 信彦 神戸大学文学部

宮野 道雄 大阪市立大学生活科学部

今村 文彦 東北大学災害制御研究センター

高島 寿 海外コンサルティング④

12:00 昼食休憩

→災害対応研究会に続く

6.5 研究成果

(1)日本側約150名、米国側5名が参加した。

(2)日米共同研究の一環として、日米双方の研究者が行っている研究内容を相手側に紹介し、研究上有益な情報交換を行った。

(3)日米の防災のあり方の比較をテーマとしたシンポジウムを開催し、両国の防災が持つ共通点と相違点を明確化した。昨年大きな災害に直面した自治体関係者から対応の実態報告を受け、防災上の問題点の明確化をはかった。

なお、現在、研究成果の詳細については、第1回比較防災学ワークショップ Proceedings に掲載（印刷中）の予定である。

7. データベース "SAIGAI"

7.1 背景

巨大災害研究センターでは、その前進である旧防災科学資料センターの設立当初より、国内における災害史資料の収集・解析を行い、これらの資料をもとに比較災害研究、防災・減災などに関する研究を実施してきた。これらの実績を踏まえて、昭和57年度よりデータベース "SAIGAIKS" を構築し、旧防災科学資料センター所蔵の論文ならびに災害関連出版物を登録してきた。この "SAIGAIKS" は、平成元年度に科学研究費（研究成果公開促進費）の補助を受けて全国的な文献資料情報データベース "SAIGA" として拡充された。現在、本センターを中核として、全国各地資料センター（北海道大学・東北大学・埼玉大学・名古屋大学・九州大学）の協力のもとでその構築作業が継続されている。登録されているデータは、平成13年4月現在で約7万件に達している。文献検索に資するため、昭和58年に科学研究費・特別研究「自然災害」の補助を受けて「自然災害科学キーワード用語集」が刊行された。さらに平成6年には、キーワードの追加・体系化を行った改訂版が「自然災害科学キーワード用語・体系図集」が刊行された。

7.2 現行データベースシステムの概要

データベース "SAIGAI" の検索サービスは、平成2年3月より京都大学大型計算機センターのデータベースへ移行しており、大学間ネットワーク (N1 システ

ム)に加入している大学であれば、日本語端末を用いて資料の検索が可能であった。しかし、最近の情報通信環境の発展にともないワークステーションやパーソナルコンピュータを用いた検索が増えており、より直感的な検索システムの導入に対する要望が強くなっていった。すなわち、従来のコマンドを主体としたキャラクター・ユーザー・インターフェース (CUI) ではなく、web サービスなどを利用したより操作性の高いグラフィカル・ユーザー・インターフェース (GUI) による検索方法の実現が期待された。

このような要望を受け、平成 10 年度における巨大災害研究センターのホストコンピュータ更新では、グラフィックス処理能力の極めて高いシリコングラフィックス社製 Onyx2 を中心としたデータベースシステムを導入した。本システムでは、データベース・アプリケーションとして、多くの実績があるオラクル社製 Oracle を採用し、今後の CD-ROM や Video による災害関連の情報、また数値地図や統計資料などのデジタル情報への対応も配慮した。

新検索システムは WWW 上に構築されており、各ユーザーはパーソナルコンピュータなどの web ブラウザから自由にアクセスが可能となっている。検索方法についても改良を行い、キーワードおよびシソーラスを用いた検索を実現している。なお、データベース

"SAIGAI" には、巨大災害研究センターのホームページ (<http://www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp>) からリンクがはられている。また、導入当初は KUINS I のネットワーク上にサーバーが設置されていたため、回線混雑時には反応が遅いとの苦情もあった。しかし、現在は KUINS II のネットワークに移行が完了しており、混雑は緩和されている。

7.3 新データベースシステムへの移行計画

シリコングラフィックス社製 Onyx2 によるシステムへ完全移行して約 3 年が経過した。従来の CUI による検索システムも並行してサービスを行っているが、利用者のほとんどは web ブラウザを利用したアクセスに移行したと思われる。利用者の増加に伴い、現行システムへの意見や要望が多数寄せられており、それらを参考にしたデータベースシステムの改善計画を作成中である。具体的には、現存の書誌情報に加えて歴史史料の検索サービスを提供する予定である。歴史史料のデータ数は 5 万件程度を見込んでおり、書誌情報と合わせると 10 万件を越えるデータベースとなる。移行時期は、平成 14 年 3 月に行われるサーバーマンシンの更新と同時期を予定している。

Information Analysis in the Field of Natural Disaster Science (28)

Yoshiaki KAWATA, Takeyoshi TANAKA, Haruo HAYASHI,
Tomoyuki TAKAHASHI and Yuka KARATANI

Synopsis

The objectives of this paper are to introduce the activities of the Research Center for Disaster Reduction Systems. They are systematically managed by not only our staff members but also many volunteers who usually belong some committees. Open symposium are held monthly and many graduate students attended every time. The 6th Seminar for Regional Disaster Prevention Plan was held to contribute loss reduction managed by local government officers. We had Memorial Conference in Kobe VI. The topics of the scene was recorded by video and after that we distributed to disaster related organizations such as the Board of Education and Land Agency and the Fire Defense Agency. The composition written by disaster-experience volunteers was kept permanently at the Hanshin-Awaji Memorial Center (tentative name) which will be established in April, 2002. The 1st Workshop on Comparative Disaster Studies was held to make advance of Japan-US urban earthquake disaster reduction studies and other contribution in the field of disaster management by local government.

Keywords: database, catastrophic disaster, comparative disaster studies, seminar, workshop